

い何なのかを次の書物からはあらためて考えさせられることになった。

- 1 カロリン・エムケ『憎しみに抗って——不純なものへの賛歌』浅井晶子訳、みずす書房、二〇一八年
 - 2 両宮久彦『この国の不寛容の果てに——相模原事件と私たちの時代』大月書店、二〇一九年
 - 3 トニ・モリスン『「他者」の起源』荒このみ訳、集英社新書、二〇一九年
 - 4 植村邦彦『隠された奴隷制』集英社新書、二〇一九年
 - 5 ジャスティン・ゲスト『新たなマイノリティの誕生——声を奪われた白人労働者たち』吉田徹・西川隆行・石上圭子・河村真実訳、弘文堂、二〇一九年
- また近年、島嶼（研究）について注目しているのだが、石原俊『硫黄島——国策に翻弄された130年』（中公新書、二〇一九年）には深く深く感銘を受けた。「周縁」として忘却されてきた島嶼が、実は近代において諸暴力が交差する比類のない「ホットスポット」であったことを石原氏は見事に描き出している。貴重な仕事である。

斎藤成也

（人類学）

- 1 河上麻由子『古代日中関係史』中公新書、

ンケは「口十下ろす」である、アイヌ語では地名と人名は付け方の原理が異なる、ラヨチ（虹）は魔物と考えられた、昆布はアイヌ語が語源であるなど、興味深い知識が満載である。

西崎 憲

- 1 Lomora Carrington, *The Complete Stories of Leonora Carrington*, Dorothyproject.com, 2017
- 2 Maewe Brennan, *The Rose Garden: Short Stories*, Counterpoint, 2001
- 3 Clarice Lispector, *Complete Stories*, Penguin Books, 1955

- 4 山階基『風にあたる』短歌研究社、二〇一九年
- 5 西崎憲『全ロック史』柏書房、二〇一九

楽しみのために本を読むということも勉強のために読むこともいまはとても難しい。仕事の資料として読んだり書評を依頼されたもの以外は手を出せない状態がもう何年もつづいていて、頭と心が瘦せ衰えるようないやな気持ちなのだが、さりとて目の前の締切を無視することもできない。なんとかならないのか。

そういうわけで一冊以外は仕事に関係して

二〇一九年

- 2 渡邊義浩『漢帝国——400年の興亡』中公新書、二〇一九年
 - 3 渡辺信一郎『中華の成立——唐代まで』岩波新書、二〇一九年
 - 4 ウィリアム・バーンスタイン『交易の世界史——シュメールから現代まで』上下、鬼澤忍訳、ちくま学芸文庫、二〇一九年
 - 5 中川裕『アイヌ文化で読み解く「ゴールデン・カムイ」』集英社新書、二〇一九年
- チャイナのことももう一度基礎から学ぼうと考え、二〇一九年について出版された1〜3の三冊を購入した。1 冒頭で論じられた倭の五王は、記紀の内容もとりこんだ、立体的なものとなっている。詳細な原文資料と参考文献もすばらしい。遣唐使の南路が五島列島を出発点としたというのは興味深い。あの島々の船乗りは、海を東西に渡ることに長けていたのであろうか。なお、三世紀の魏志に登場する倭のことはなぜかすつとばされていた。
- 2 を読んで、なんとなく王莽が前漢をいったん滅ぼした経緯が納得できた。儒教恐るべしである。儒教に抵抗した曹操はこの意味でも刮目すべき存在だが、筆者は織田信長が曹操にかなり心酔していたのではないかと、つねづね考えている。もっとも、曹操は太平道信者を吸収したが、信長は一向宗を徹底的に

いる本である。1、2、3は電子書籍で翻訳書の刊行を考えている。

レオノーラ・カリントンとは文学の世界では有名だろう。シュレアリズムに数えられる者のうちで筆力は一、二を争うのではないだろうか。

メーヴ・ブレナンは『ニューヨーク』に作品を寄稿していた。都市生活者の機微などを苦みとさびしさをまじえて描いた。紹介がまだまだ不十分であり、埋もれたままではあまりにも惜しい。

クラリス・リスベクターはブラジルの作家で、リアリズム、詩、幻想が混じった驚異的な書き手である。そしてとても線が太い。ユダヤ系。

- 4 は歌集である。一九九〇年代くらいから短歌の形式はほんとうに変わってきて文語中心から完全に口語中心になり、あれほど堅固だった五七五七七のフォーマットも少しずつ自由度を増していった。そして個人的にはその語数のフォーマットが最大の特徴だったと思っていたのだが、より堅固だったのは短歌プロバターのあいだで「私性」と呼ばれるもののような。短歌は基本的にまだ「作者」語り手である。しかし二〇〇〇年代に入ってから、もしかしたらそのあたりも揺れてきているかもしれない。

生家にはどこを明るくしたいのかよくわか

弾圧した。

- 3 は「シリーズ中国の歴史」の第一巻である。新石器時代のところで、筆者も論文作成にかかわった植田信太郎の古代人ミトコンドリアDNA研究への言及があった。この問題は、古代人ゲノム研究が急速に進展している現在、いずれ大きく発展することが期待される。1と2にはない索引が、3ではきちんと提供されているのに好感をもった一方、チャイナ史で重要な役割を古代から果たしてきた「宦官」の語が索引に登場していないのが残念だった。

- 4 は二〇一〇年に刊行された訳書の文庫化されたもの。原書は二〇〇八年刊。原作者は歴史学のプロではないところが、本書の興味をひく点のひとつだ。ネット時代の今、視点を明確にしたら、だれでも簡単に膨大な資料をさがしあてることができるようになった。もっとも、本書の副題にあるシュメール文明時代の交易は、せいぜいデカン半島までであり、当然そこからつながっていたと思われる東南アジアとの交易の記述はみつからなかった。

- 5 は、新学術領域ヤポネシアゲノムの言語班メンバーであるアイヌ語の専門家による高い人気を誇るコミックの解説書。著者はこのコミックのアイヌ語監修をした。主人公の名前の意味は新年あるいは未来である、チャラ

らないままのスイッチ

気に入った服が小さくなることはないね真

夜中の息継ぎ

友人が嘔吐している 友人はわたしの前で嘔吐ができる

真夜中の国道ほくのすぐ先を行くパーカーのフードはたはた

最後の『全ロック史』は拙著である。スコットランド系のアイルランド人たちが北米のアパラチア山脈に移住した頃からはじまる一世紀半にわたるロックミュージックの歴史である。ひとりで書いたこのジャンルの全史は英米にもほとんどない。必要なものはまず蛮勇だった。アン・パワーズの *A Concise History of Rock Music* と大和田俊之『アメリカ音楽史——ミンストレル・シヨウ、ブルースからヒップホップまで』と一緒に読んでいただきたい。

上野千鶴子

（社会学）

- 1 石川九楊『河東碧梧桐——表現の永続革命』文藝春秋、二〇一九年

俳句は世界最短の詩型。その俳句の革新に挑んだ河東碧梧桐の評伝、に見えて、それを越えた近代俳句史を書き換える挑戦。新興俳句はなぜ失速したのか？ 口語自由律は、なぜ定型に勝てなかったのか？ 自由律俳人と